

Human link

まちとひとを紡ぐ「ててて」な空間

八代研究室
00812081 田中 亮

1. はじめに

近年、人と町の間には活気がない。

個人の余暇活動が多様化し、職縁や世代を超えた新しい人間関係が生まれている。その一方、生活するうえで欠かせなかった身近な「周囲」との交流が希薄になり、たとえ近所であってもお互いの生活にあまり干渉しない付き合い方が望まれている。このことから個人的な人とのつながりは親和的であるが、相対的に見た人間関係の空白部分は増えている。人と町との交流の変化を踏まえて心と町の隙間を埋めるような提案をする。

2. 計画地

敷地は埼玉県深谷市 JR 深谷駅北口から中心市街地に点在する空き地郡で、駐車場に設定する（図1の左上・濃グレー部分）。

深谷の中心市街地は様々な個性を持った人たちが入り交じる土地であるが、新興住宅地への生活の依存により活気がなくなっている。また、時代の流れに都市基盤の整備が追いつかず歩道空間やコミュニティスペースが確保できない状態である。上記の問題を抱えているにも関わらず虫食い状に空き地が増殖し、駐車場などの余剰空間は飽和状態にある。

3. 計画内容

深谷地方では驚いたり、感動したときに「てえー！」と言う方言が存在する。さらに驚いたときには「て」を連発する。本計画では以下の3つのキーワードを軸に驚きが連鎖するような「ててて」な空間を提案する。

①まちの胎内空間

余剰空間を歩行空間として解放することにより中心市街地への安全なアクセスを確保する（図1の破線部分）。余剰空間はかつて住宅が位置していた場所でも通り道ではなかった。そこに人を引き込むこと

は新たな視点やまちの胎内感覚を想起させる。深谷の中心市街地は町家の形態を保っており道路に対する間口が狭く閉鎖的である。車道に依存していた町を内側に開くことによって町とのつながりを強くする（図2）。歩道空間を歩く過程に配置されたオブジェクトを利用することによって地域の住民との交流が誘発され深谷の町を知ることができる。

②まちみち空間

余剰空間を自己表現の空間として解放する。町と歩道を分けるように計画されており、まち側は地域の共用の庭として利用される。みち側には活動を意識させ交流を促す空間を計画する。人の表現活動が驚きを生み、驚きの空間が連鎖する。

③てててモジュール

人と人との接し方は、約1.5mや3mごとに意識に変化が表れる。このモジュール感覚を計画に反映させ親密な交流が生まれる空間とする（図3）。舗道はあいさつ領域となっており、すれ違った人たちのあいさつを誘発する。また、住宅と舗道を隔てる壁は掲示板として使用されまちとひとを紡ぐ役割を担う。中心には交流空間を配置し3mの会話領域とする。また、交流空間にはエリアごとに異なった機能が計画されており、用途に見合った人々が交流する空間となる（図4）。舗道から交流空間に歩行者を引き込み、表現者との交流を促す計画となっている。

4. おわりに

私たちの生活スタイルは刻々と変化している。情報や物流の速度は飛躍的に加速し、交流に内在していた距離と時間の制約を克服している。しかし、こんな時代だからこそ自分の足で人や地域とつながり、自分の生きている町を確認するとともに後世に文化を伝えていくことが大切だと考える。

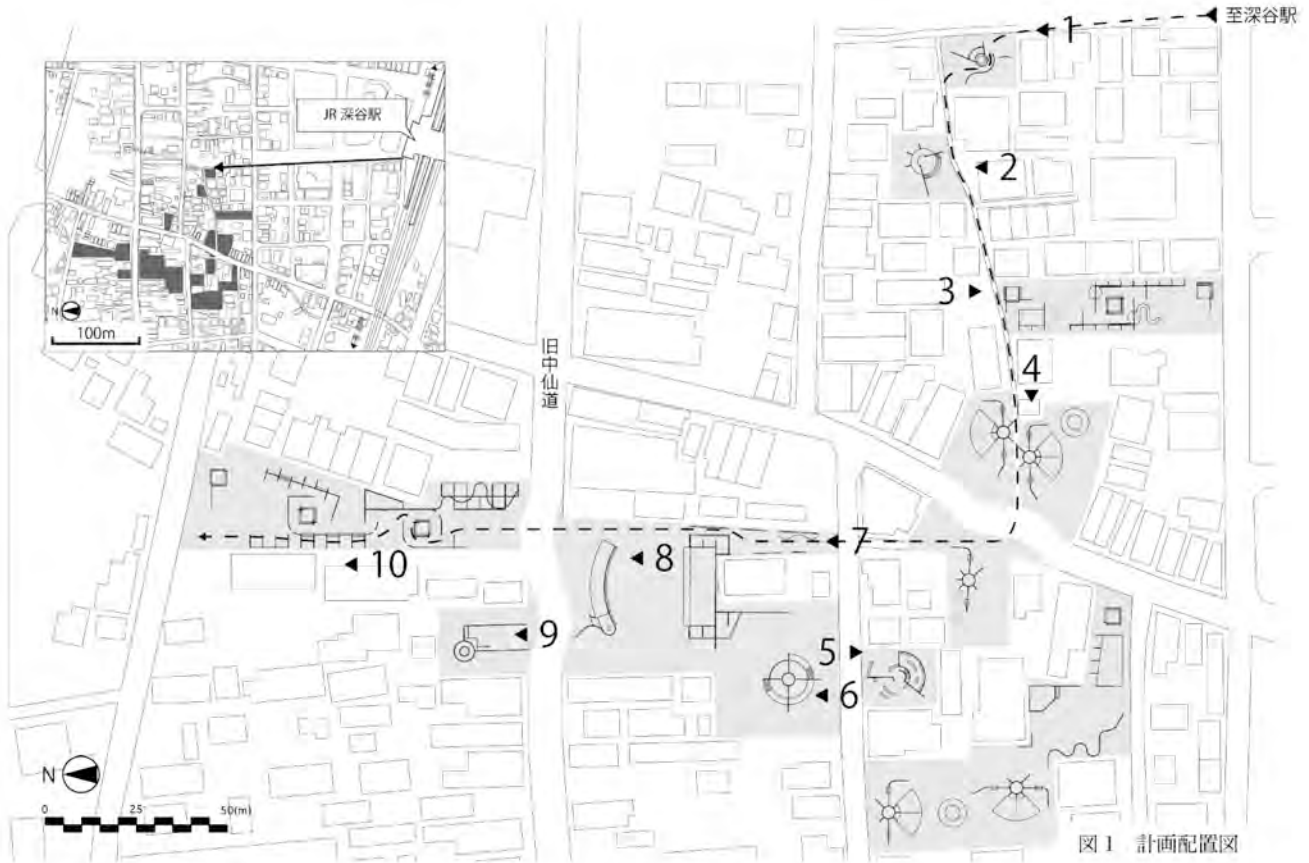


図1 計画配置図

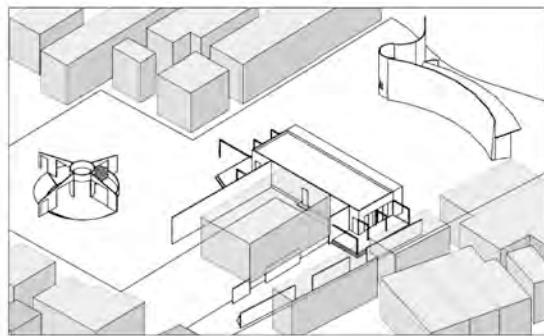


図2 町の内側に開かれる空間 (6、7、8)

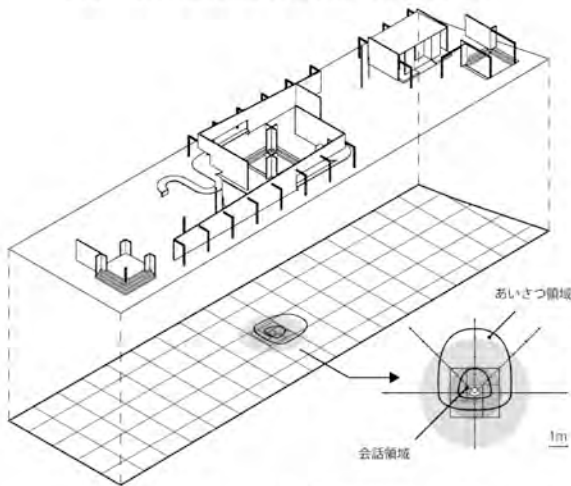


図3 3m空間に基づいた計画 (3)

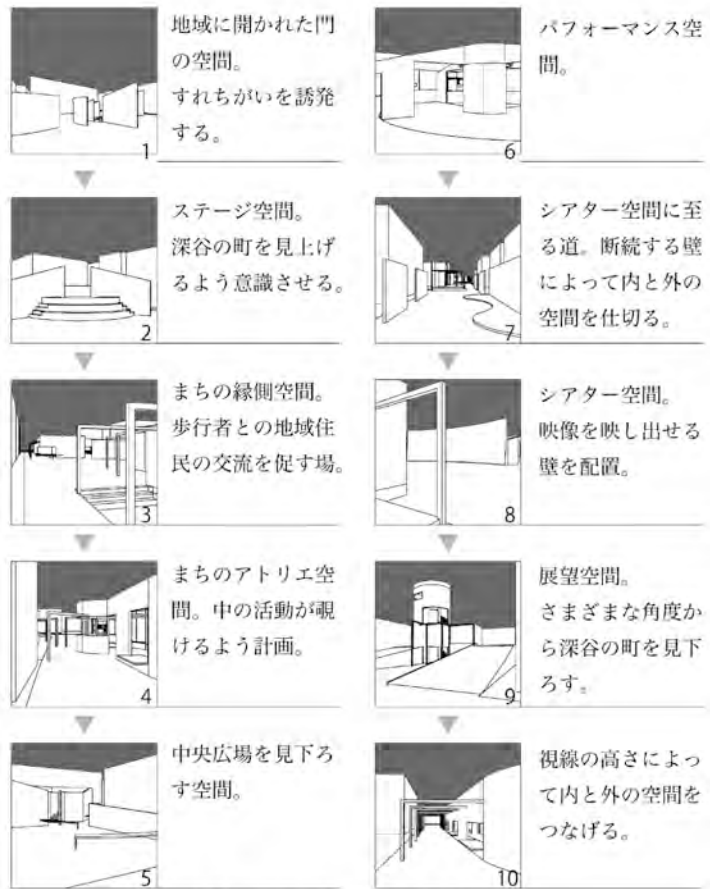


図4 ててて空間のシーケンス